

県内産母豚 (LW) との交配に最適なデュロック種系統はユメサクラである					
[要約] 県内産母豚 (サガ LW) にユメサクラを交配した LWD 肉豚は、高い発育性を示すとともに飼料給与効率も高い。					
畜産試験場・中小家畜部・中小家畜研究担当			連絡先	0954-45-2030 chikusanshiken@pref.saga.lg.jp	
部会名	畜産	専門	養豚	対象	養豚

[背景・ねらい]

世界的な穀物価格の高騰は、県内養豚農家に深刻な影響を及ぼし、経営存続にとって大きな不安要因となっている。また、産地間競争の激化により、特色ある高品質な豚肉の生産が不可欠となっており、種豚の統一による遺伝的な斉一性を図ると共に、機能性成分の高度活用による新銘柄豚生産技術の確立が求められる。

県内に目を向けると、母豚供給体制はある程度整備されているが、交配する種雄豚 (デュロック種) について県内で確立した系統がない。そのため県外導入や自家更新など各農家様々に対応しており、三元交配における最適な交配の組み合わせがなされていない状況にある。

そこで本試験では、佐賀県内で多くの農家が利用する F1 交雑種母豚 (サガ LW) に対し、農家が常時精液により導入可能なデュロック種系統 3 系統 (ユメサクラ、ゼンノー D、富士農場系) をそれぞれ交配し、生産した LWD 肉豚の産肉性を検証する。

[成果の内容・特徴]

- 110kg 到達日齢および 1 日平均増体重について、ユメサクラが他の 2 系統より有意に高い (表 1)。
- 飼料摂取量、飼料要求率については有意な差が認められないものの、ユメサクラが少ない傾向となっている (表 2)。
- 枝肉成績については、枝肉重量で富士農場系が他の 2 系統より有意に高く、歩留、ロース芯面積についても高い傾向を示すなど、高い産肉性を示している。しかし一方で、背脂肪厚は富士農場系が他の 2 系統より有意に厚くなっており、上物率も有意に低い (表 3)。

[成果の活用面・留意点]

- 当試験場では県内農家に対し精液供給をおこなっているところであり、特に止め雄であるデュロック種については供給本数が年々増加傾向にある。今後は交配の面からも産肉性の向上を図るため、デュロック種の精液供給についてはユメサクラを中心に供給していくこととしている。
- 今回の試験はサガ LW に対する評価であったが、産肉形質の遺伝率は 0.4~0.5 と高く遺伝しやすいことから、他系統の種雌豚との組み合わせであっても同様の傾向を示すものと考えられる。

[具体的データ]

表 1. 発育成績の比較

	ユメサクラ (n=7)	全農 (n=6)	富士農場 (n=12)
110kg到達日齢 (日)	143.6 ± 12.8 _a	162.8 ± 9.0 _b	159.3 ± 9.6 _b
DG (g/頭・日)	1045.2 ± 132.7 _a	847.9 ± 75.0 _b	865.7 ± 74.9 _b

異符号間に有意差あり (P<0.05)

表 2. 飼料給与成績の比較

	ユメサクラ (n=7)	全農 (n=6)	富士農場 (n=12)
飼料摂取量 (kg/頭: 試験期間)	234.1	253.7	267.6
飼料要求率	2.74	3.16	2.83

異符号間に有意差あり (P<0.05)

表 3. 枝肉成績の比較

	ユメサクラ (n=7)	全農 (n=6)	富士農場 (n=12)
枝肉重量 (kg)	72.1 ± 2.5 _a	69.4 ± 2.3 _a	77.2 ± 2.5 _b
歩留 (%)	62.5 ± 1.3 _a	64.5 ± 0.9 _{ab}	65.5 ± 1.8 _b
ロース芯面積 (cm ²) ※	39.1 ± 5.1	37.8 ± 4.1	40.4 ± 4.2
背脂肪厚 (cm)	2.1 ± 0.5 _a	2.2 ± 0.5 _a	2.9 ± 0.4 _b
上物率 (%)	57.1 _a	66.6 _a	0.0 _b

※体長 1 / 2 部位の超音波診断による
異符号間に有意差あり (P<0.05)

(大曲秀明)

[その他]

研究課題名: 産地間競争に対応した佐賀型新銘柄豚生産モデルの検討

予算区分: 県単

研究期間: 2010~2012 年度

研究担当者: 大曲秀明、宮下美保、脇屋裕一郎、永瀨成樹